

第3節 加賀における奈良・平安時代遺跡の動態

—加賀国府の所在地をめぐる—

加賀国は弘仁14(823)年、越前国より江沼・加賀の2郡を割いて立国した。その国府が、この年6月に江沼郡を割いて建てられた能美郡にあったということはもはや通説となった感がある。それは、各国の国府の所在地を示す基準史料として知られ、10世紀前半代に成立したとされる『和名類聚抄』(以下、『和名抄』)の国郡部の記載による。また中世の古辞書、『伊呂波字類抄』や『拾芥抄』にも同様の記載が見られる。従来の文献史学や歴史地理学的研究の成果は、加賀国府が小松市古府町(旧能美郡国府村)、梯川右岸の台地上にあったという点では異論を見ない。

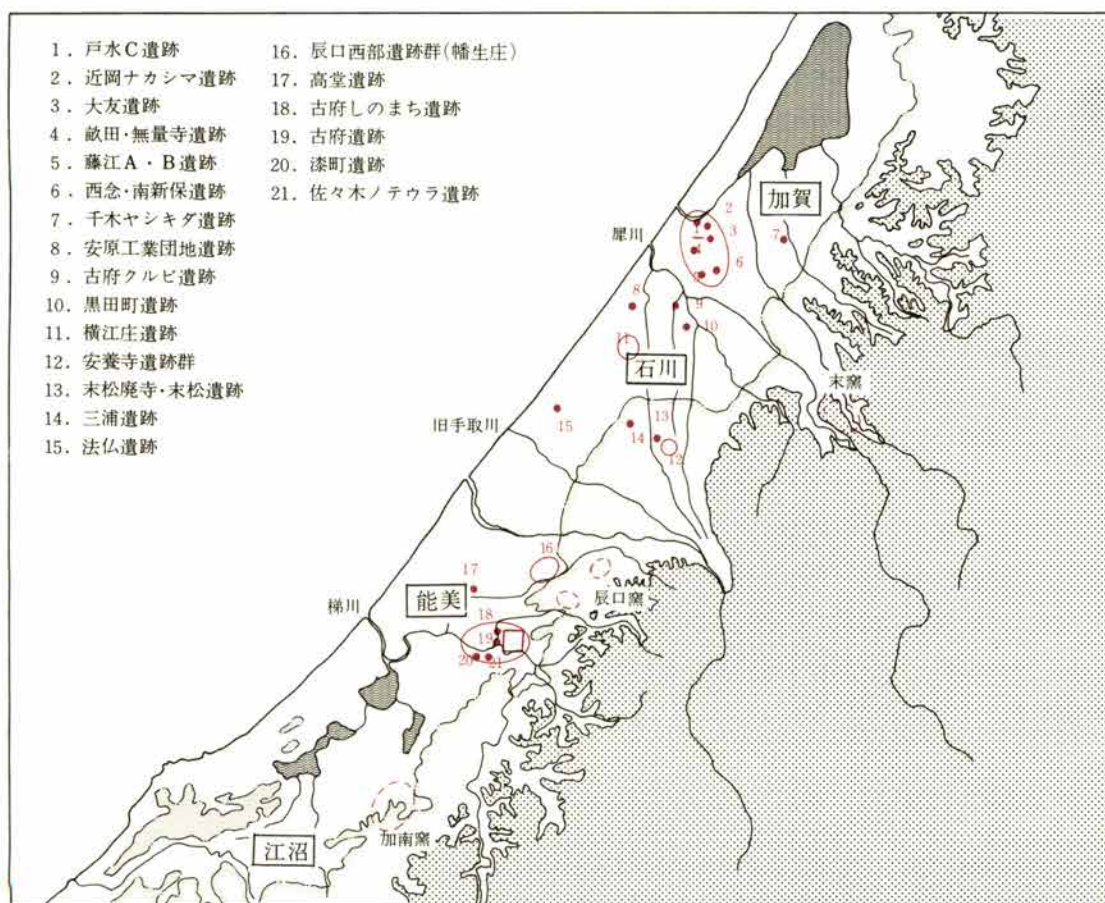
しかし近年、大東急記念文庫本『和名抄』(以下、大東急本)が紹介されるに至り、加賀国の国府の所在地については、その移転の可能性が問題となっている。弥永貞三氏⁽³⁹⁾は、大東急本のほうが流布本よりもより原撰本の体裁を残したものとし、国名肩書註の記載は『和名抄』成立以前の貞観・元慶期を上限とする9世紀後半の状況を反映したもので、郡名下註のそれは肩書註より古い時期のものと推定した。すなわち加賀国に照らして言えば、立国後、9世紀前半代は加賀郡に国府が所在し、9世紀後半には能美郡へ移転したということになる。一方、木下良氏⁽⁴⁰⁾は、「郡名註の国府をそれ以前にさかのぼらせることは、加賀国の場合考えられない」とし、大東急本の国府所在に関して矛盾のある他の5国についても、「全体を通じて考えると、肩註を前として郡名註を後とする方が適当」として、弥永氏とは逆の見解を提示している。また、『色葉字類抄』(前田本・黒川本)の国府所在の記載についてはその成立時の12世紀中頃の状態を示している可能性が強いとして、これと密接な関係にある大東急本『和名抄』の郡名下註の国府記載もそれと近い時期のものと考えた。それにしたがって氏は、加賀では平安時代後期に能美郡から加賀郡へ国府が移転したとする仮説を立て、加賀郡の国府候補地としては金沢市古府(古保)に注目している。しかしこの点については、吉岡康暢氏⁽⁴¹⁾が『源平盛衰記』などの史料から考定したように「11～12世紀代には、加賀国府一府南社一國分寺一中宮八院が相互に近接して」古府台地とその周辺に所在したことは疑いない。ただ木下氏が摂津国の例と『色葉字類抄』の出羽・越中・備前・大隅の諸国でその可能性を考えた、「国府」と「府」の併置という現象が実在し、加賀の場合でもそれが考えられるのなら問題は残る。

本稿では当初、加賀国府の所在地・移転の問題を考古学的な面からアプローチすることを目的としたが、資料的制約や筆者の力量不足から断念せざるを得なくなった。そこで、二・三の気づいた点を記して将来への問題提起としたい。

加賀国府として従来から認められてきた古府台地周辺の考古学的な調査はさほど多くはない。台地上は過去の土地改良事業等によって十分な調査を経ないまま削平され、現在では地山が露呈し遺物の散布も認められない。僅かに部分的な調査が実施された古府廃寺(十九塔山)では10世紀中頃の瓦が出土しており、吉岡氏は同廃寺を山岳仏教系寺院とし、平安時代中期の加賀国分寺に想定している⁽⁴²⁾。台地周辺部の遺跡としては、古府しのまち遺跡⁽⁴³⁾、古府遺跡⁽⁴⁴⁾、梯川を挟んで対岸の左岸一帯では、漆町遺跡⁽⁴⁵⁾、佐々木アサバタケ遺跡⁽⁴⁶⁾、本遺跡などが発掘調査されてお

第4表 諸古辞書に見る国府所在郡の異同 (木下1982、一部加筆)

国 名	和 名 類 聚 抄				色 葉 字 類 抄 郡名下註	伊呂波字類抄 郡名下註	拾 芥 抄 郡名下註
	流 布 本		大 東 急 本				
	国名 下註	郡名 下註	国名 肩註	郡名 下註			
加 賀	能美	能美	能美	加賀	加賀府	能美府	能美府
越 中	射水	—	射水	礪波	礪波国府 射水府	射水府	射水府
志 摩	英虞	—	英虞	答志	答志府	英虞府	英虞府
飛 騨	大野	—	大野	益田	益田国府	大野府	大原府
出 羽	平鹿	出羽	平鹿	出羽	平鹿府 出羽府	平鹿府	出羽府
備 前	御野	—	美能	上道	上道国府 御野府	御野府	御野府
肥 前	—	小城	—	小城	佐嘉国府	佐嘉国府	—
肥 後	—	益城	—	益城	飽田国府	飽田府	飽田府 益城府
大 隅	—	桑原	—	桑原	桑原国府 曾於府	—	贈於府
摂 津	保安元年（1120）「摂津国大計帳案」西生府 住吉国府						



第63図 加賀中央部における奈良・平安期の主要遺跡(S=1/400,000)

り、それらの調査成果と台地上で採集された遺物⁽⁴⁷⁾から加賀国府想定地の梯川中流域の遺跡群の動向をみると、8世紀後半はもとより9世紀前葉～中葉の状況が著しく貧弱なことに気がつく。

9世紀後葉に至って徐々に遺跡は増加するが、それは小規模なもので、飛躍的な発展を遂げるのは10世紀前葉～同中葉である。この頃、漆町遺跡では多量の緑・灰釉陶器や11点にも及ぶ石帯が出土し、「国衙機構に連らなった有力農民層の存在を示す⁽⁴⁸⁾」とされるように、また、古府台地に瓦葺き建物が登場することや窯業生産地一戸津窯跡群の急激な生産拡大などに見られるように、国府所在地に相応しい状況を呈している。以後遺跡は一時衰退するが、12世紀になって再び活発な展開をみせる⁽⁴⁹⁾ようになる。

一方、加賀郡の状況はどうであろうか。当地では、金沢平野の北西部、犀川・大野川・浅野川に挟まれた強粘性灰色低地土壌の地域に律令期の遺跡が密集する⁽⁵⁰⁾。8世紀後半代には、西念・南新保遺跡⁽⁵¹⁾や藤江B遺跡⁽⁵²⁾で「庄」の墨書土器が出土したように、庄園経営を契機として開発が始まったとみられ、9世紀前半にも、いわゆる大型建物を含む畝田・無量寺遺跡⁽⁵³⁾、千木ヤシキダ遺跡⁽⁵⁴⁾が存在する。9世紀後半～10世紀前葉に遺跡群はピークを向え、官衙級遺跡とされる戸水C遺跡⁽⁵⁵⁾、藤江A遺跡⁽⁵⁶⁾、近岡ナカシマ遺跡⁽⁵⁷⁾、安原工業団地遺跡⁽⁵⁸⁾で大型建物が検出されている。このような遺跡群のあり方を国衙に付随する「曹司」地区的なものとして捉える意見も出されている⁽⁵⁹⁾。また千木ヤシキダ遺跡では11世紀の9間以上×2間で両面廂、大規模な柱穴掘り方をもつ建物が検出されており、10世紀中葉以降急速に衰退する当地の遺跡群のなかでは、官衙級遺跡として注目される。古府町周辺では、古府クルビ遺跡⁽⁶⁰⁾、黒田町遺跡⁽⁶¹⁾で奈良時代の屋瓦が出土し、後者の遺跡で9世紀後半～10世紀前葉の遺物が出土したほかは顕著な遺跡は調査されていない。加賀郡に国府の所在を求めれば、遺跡群の動態からみて可能性のあるのは9世紀前半～10世紀前葉、11世紀の2時期であろう。

以上、梯川中流域と金沢平野北西部の遺跡群の動態を大まかに対比してみたが、その変遷には微妙なズレのあることは確かである。なかでも、加賀立国当初の9世紀前半～中葉の時期に前者の地域で顕著な遺跡が認められないのは不可解な感を与えている。もとより、遺跡の動態を扱う際には未発見のものを考慮せねばならないことは言うまでもないし、個々の遺跡の性格を吟味して比較せねばならないものも当然である。能美郡の国府想定地の遺構確認が不可能に近い現在、考古学の面から国府の所在地・移転の問題に迫るには、先の点をふまえて、各想定地とその周辺を含めた広い地域の遺跡の総合的な検討作業を地道に行っていくしかない。ここでは、単に問題提起に終わったがその作業は今後の課題としたい。加賀立国当初の国府所在地については再検討の必要があるように思えてならない。

註(1) 坂井秀弥 1983 a 「越後における七・八世紀の土器様相と画期について」『信濃』第35巻第4号 信濃史学会、同 1983 b 『栗原遺跡第6次発掘調査概報』新潟県教育委員会

(2) 岸本雅敏 1982 「東江上遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編』上市町教育委員会

(3) 吉岡康暢 1983 「奈良平安時代の土器編年」『東大寺鎮横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会

- (4) 註(2)(3)文献。ここではVI期以降に齊一化される甕D類、埴C類、甗B類を「北陸型」煮沸土器セットと呼称しておく。なお甗は9世紀代の例が不明確なものの、8世紀後半代には口縁部断面がB字状となり直線的な体部に底端部が内側に張り出すタイプが主流になるとみられ、形態に差はあれ、甕D I類「北陸型」に準じた成形・調整法のもの甗B類の「北陸型」と捉えておく。
- (5) 小笠原好彦・西弘海 1976 「平城宮 I～VIIの大別」『平城宮発掘調査報告』VII 奈良国立文化財研究所
- (6) 木立雅朗 1985 「能美窯跡群の須恵器編年 (I)北群」『辰口町湯屋古窯跡』 辰口町教育委員会
- (7) 小松市桃の木山窯跡群、同湯屋窯跡群、高松町八野窯跡群などで検出されている8世紀第1四半期頃の小形平窯については、同期に出現する赤彩土師器の生産を主目的とした窯と考えられる。煮沸形態ロクロ土師器は、坂井氏の指摘するように(坂井1983 a)、須恵器窯内で酸化焰焼成されたもので、窯体内・灰原から出土する還元化したものは、須恵器として焼成された(岸本1982)のではなく、不良品として廃棄されたものと考えうる。なお、10世紀段階の戸津窯跡群の土師器平窯では甕の生産が行われている。
- (8) 註(3)文献
- (9) 奈良時代の須恵器、土師器の機能分化(吉岡1979「北陸の須恵器」『世界陶磁全集』2 日本古代 小学館)やロクロ土師器甕の存在(坂井1983 a)は、越後も含めた汎北陸的な政治色の濃い現象と理解できるが、ここではロクロ土師器の出現・普及には若干の地域差も存在するという見通しから加賀地方に限定した。第3表では加賀中部へも多量の製品を供給したとみられる高松町～押水町の河北窯も考慮すべきであったが、その変遷が整理されていないので今回は除外した。
- (10) B類は註(4)で述べたもののほかバラエティーがあり、口縁形態では端部はいづれも面をなすが、直立するもの、くの字状のもの、断面D字状のものがあり、底部形態では内湾しながら終るもの、外へ水平～ハの字状に開くものがある。
- (11) カマド形土器は、5世紀後半代のものが富来町高田遺跡、志賀町中村畑遺跡、7世紀～8世紀のものが七尾市細口源田山遺跡、穴水町曾福遺跡、中島町外遺跡、七尾市古府タブノキダ遺跡、羽咋市寺家遺跡、鹿島町徳前C遺跡で出土しており、能登に多いのが大きな特長となっている。
- (12) 坂井町長屋遺跡、山口充氏の好意により実見。
- (13) 四柳嘉章・高橋裕 1972 「加賀市千崎・大畠遺跡」 石川県教育委員会
- (14) 吉田淳 1984 「御経塚ツカダ遺跡発掘調査報告書」I 石川県野々市町教育委員会
- (15) 田嶋明人他 1982 「漆町遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
- (16) 田嶋明人氏教示。同遺跡金屋サンバンワリ地区163号土坑。
- (17) 該期の羽咋市柳田タンワリ1号窯では、叩打・ケズリ・カキメ技法を伴う土師器長胴甕の形態に類似した土師質の甕が灰原から出土している。甕C類の出現とともに須恵器工人が土師器製作に関与する前段階の様相として興味深い。
- (18) 埴C類の集落での出土例は現在のところ未確認だが、辰口町湯屋窯跡群内の製品集積地で須恵質のものが出土しており、土師器の製品も存在した可能性が高い。同窯跡群の中では若干後出的なA I支群からは内面にカキメ調整を施す土師器埴が表採されている。
- (19) IV・V期は煮沸土師器の非ロクロからロクロ製品への転換期で最も複雑な様相を呈する。IV期の須恵器窯のほとんどで煮沸土師器の生産が開始されていたとみられるが、依然として旧来の土師器生産体制による製品の供給が存続したためこのような状況を呈したと考えられる。なお該期には、保賀B遺跡1号土坑出土品にあるような外面ケズリ調整の甕が存在する。
- (20) 小松市桃の木山1号窯の窯体内で出土している。
- (21) 橋本澄夫 1982 「石川県金沢市今町A遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
- (22) 中島俊一 1982 「松任市上二口遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
- (23) 石川県立大聖寺高等学校郷土研究部 1969 「加賀市保賀B地点遺跡の調査」『石川考古学研究会々誌』第12号 石川考古学研究会
- (24) 田嶋正和他 1983 「篠原シゴウ遺跡発掘調査報告」 加賀市教育委員会
- (25) 1980年度、石川県立埋蔵文化財センター調査。該期の良好な土坑資料がある。報告書近刊予定。
- (26) 1982年度、石川県立埋蔵文化財センター調査。
- (27) 吉岡氏は註(3)文献でその出現を氏の編年I₁期にしているが、その後の調査資料から本稿II期に遡ること

は明らかである。

- (28) 吉岡氏が註(3)文献で、II期(8世紀後半)には「甕類は、伝統的な紐巻き上げ成形、刷毛目調整の個体は激減し」として、「なお8世紀代を通して旧来の紐巻き上げ品が併存する」とした点については、その根拠とされる三浦遺跡中層出土資料の評価にかかるが、もし仮にその資料を認めたとしても、土師器工人の存続を示しうだけの量比はこの段階では持たないと考えられる。8世紀後半代の調査資料の蓄積を待ちたい。

供膳形態土師器については、赤彩土師器は9世紀前半代まで一定の比率を占めて存続するが、器種等から考えてその生産は8世紀初頭以来、一貫して須恵器工人組織下にあったとみられる。黒色土師器は、その技法自体は伝統的なものであるが、非クロコ煮沸土師器と同様に8世紀後半にはほとんどみられなくなる。9世紀前半のある段階に再び出現し量を増す黒色土師器は新器種の椀・皿であって、多くが外面を赤彩としたいわゆる赤彩黒色土師器であることから、これも赤彩土師器と同じ生産体制のなかで産み出されたものと扱えられる。8世紀後半代までは、供膳形態土師器の主体はあくまでも赤彩土師器であったと言える。黒色土師器主体に転換するのは9世紀半ば頃であろう。

9世紀後半のある段階(給分小袋窯期)から急激にその量を増す供膳形態土師器は、黒色土師器も含め、その器形は新器種の椀・皿であって8世紀～9世紀前半代までの赤彩土師器を主体とした供膳器の系譜に連なるものではない。この段階は律令期土器生産体制第2の大きな画期と位置付けられており(坂井秀弥1984「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告』I 新潟県教育委員会。田嶋明人1985「加賀地域にみる10世紀～13世紀にかけての土師器の変遷」(「第4回中世土器研究会集會発表資料」、近刊予定の漆町遺跡の調査報告書参照)、従来の供膳器一須恵器主体のあり方が大きく転換する時期である。その背景には、この段階の施釉陶器の多量の流入といった現象も一つの大きな要因と考えられるが、少なくとも従来の供膳形態土師器の流れの範疇で扱えられるものではない。この時期に土器生産体制がどのように変容したかは今のところ定かでないが、供膳形態土師器も他の土器とともに、この時点で変容をみた新たな土器生産体制の中で生産されたものであろう。以後、積極的に須恵器の中にその器種が取り込まれていったのも、そのような事情を反映したものと受けとれ、奈良時代以降の一元的な生産体制を継承すると推察している。

以上、冗長な補足説明となったが、課題は7世紀末ないし8世紀初頭に再編成されたと考えられる「律令的土器生産体制」(岸本1982)の内容、すなわち、再編の主体であったとみられる在地支配機構との関わりやより具体的に旧来の須恵器工人集団と土師器生産者の実体を明らかにし再編の過程を跡付けることであろう。

土器生産体制の問題を論じる際に、三辻利一氏や吉岡・木立氏が述べる(註3、6文献)ように、胎土分析の成果は重要な意味を持つと口える。本稿III～V期のクロコ土師器と須恵器、クロコ土師器と非クロコ土師器の生産地の問題について、古墳時代以来の非クロコ土師器が集落近隣から採土したものによると仮定し、また江沼盆地と小松丘陵の胎土に差があると仮定した場合、例えば、保賀B遺跡や篠原遺跡の非クロコ土師器甕・クロコ土師器甕・須恵器の胎土分析を実施することによって多くの示唆に富んだ結果が得られよう。ただ胎土分析等の自然科学的な調査の成果を援用する場合には、それ以前に考古学的方法による資料的裏付けが不可欠なことは言うまでもない。

本稿は土器生産体制の問題を論じることが主目的ではないので、その点については別稿に譲ることとした。

- (29) 元興寺文化財研究所 1984 「特集 地鎮・鎮壇」『古代研究』28・29
- (30) 谷内尾晋司・米沢義光・浜野伸雄他 1981 「遺構」『中島町小牧・外遺跡』 中島町教育委員会
- (31) 報告書近刊。
- (32) 註(30)文献
- (33) 報告書近刊。概要は北野博司 1985 「徳久・荒屋遺跡」『昭和59年度県営は場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』 石川県立埋蔵文化財センターを参照。
- (34) 報告書近刊。山本直人 1986 「辰口町岩内遺跡テラダ地区出土の墨書土器」『拓影』第20号(『石川県立埋蔵文化財センター所報』)
- (35) 註(15)文献
- (36) 戸潤幹夫他 1983 「金沢市戸水C遺跡(6)」 石川県教育委員会
- (37) 四柳嘉章他 1980 「西川島・I」 穴水町教育委員会
- (38) 水野正好 1985 「招福・除災—その考古学—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集、国立歴史民俗博物館

- (39) 弥永貞三 1977 「大東急記念文庫本『和名類聚抄』の国郡部記載について」『歴史地理』 93 卷 1 号 日本歴史地理学会
- (40) 木下良 1982 「大東急記念文庫本『和名題聚抄』と前田本・黒川本『色葉字類抄』に見る加賀国府と越中国府」『北陸都市史学会報』No.4 北陸都市史学会
- (41) 吉岡康暢 1976 「平安前期の地方政治と国分寺(上)ー加賀国分寺をめぐる問題」『金沢大学日本海域研究報告』第8号 金沢大学日本海域研究所
- (42) 註(41)文献
- (43) 橋本澄夫・小村茂 1974 「古府しのまち遺跡」 石川県教育委員会
- (44) 米沢義光 1985 「古府遺跡」『昭和 59 年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』 石川県立埋蔵文化財センター
- (45) 註(15)文献
- (46) 米沢義光 1985 「佐々木A(アサバタケ)遺跡」『昭和 59 年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』 石川県立埋蔵文化財センター
- (47) 註(41)文献
- (48) 註(15)文献
- (49) 漆町遺跡、古府遺跡、本遺跡などで掘立柱建物群や顕著な遺物の出土がみられる。
- (50) 出越茂和 1983 「金沢市内における律令時代の遺跡」『金沢市畝田・無量寺遺跡』 金沢市・金沢市教育委員会
- (51) 宮本哲郎他 1983 「金沢市西念・南新保遺跡」 金沢市・金沢市教育委員会
- (52) 四柳嘉章 1976 「金沢市藤江A・B遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』III 石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団
- (53) 出越茂和他 1983 「金沢市畝田・無量寺遺跡」 金沢市・金沢市教育委員会
- (54) 1984 年度、金沢市教育委員会調査。調査担当出越茂和氏教示。
- (55) 註(36)文献
- (56) 註(52)文献
- (57) 1984 年度、金沢市教育委員会調査。調査担当出越茂和氏教示。
- (58) 宮本哲郎 1977 「金沢市安原工業団地遺跡」 金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会
- (59) 戸潤幹夫、出越茂和氏教示。
- (60) 橋本澄夫他 1976 「金沢市古府クルビ遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』III 石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団
- (61) 南久和他 1979 「金沢市黒田町遺跡調査報告書」 金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会